



◇ 最後に伝えたいこと

3学年主任 数野よし子

この場所に文章を書くのも最後になりました。皆さんの卒業を前に2つのことを伝えたいと思います。

15年前、本校を卒業した一人の生徒の話。

私は、3年次に初めて彼女の担任になりました。教室での彼女は、口数少なく、明るいというよりは落ち着いている印象でした。それが一変したのが7月の球技大会でした。バスケ部だった彼女は、大声でチームを鼓舞し、素晴らしいタイミングでシュートを決め、およそ見慣れてきた肉弾戦とは全く違う世界を見せてくれました。チームは学年2位、クラスは盛り上がりました。夏休みが明けた9月、進路に向けての二者懇談で彼女は、「大阪の調理の専門学校に行きます」と言いました。具体的な進路になったことはよかったです。単身大阪に行くことに私は驚きました。「東京にも学校はあるよ」と私。「住みこみで働きながら通学できる専門学校はそこしかありません」と彼女。早朝、店の掃除をしてから登校し、下校後閉店する10時近くまで住みこみの店で働く。その代わり朝夕2食と下宿代は免除。

母子二人で生きてきた彼女が決めた進路。推薦書には「自分の店をもつ夢」を実現するために、どんな努力も惜しまない彼女の姿を書きました。彼女たちの卒業を見送り、私は東高校を異動し、調理の専門学校を志望する生徒に会うたびに彼女を思い出しました。2年後、年賀状とともに届いた封書には、京都の和菓子店のパンフレットと見慣れた彼女の文字で「就職しました。」とありました。あれから10年余り。彼女の夢は実現していると確信しています。

人生は足し算、引き算。

この言葉を初めて目にしたのは、私がそれまでの人生で最も大きな決断をしてしばらくたってからでした。誰かのコラムだったか、新聞だったか…定かではありません。けれど、当時の私の疲れ切った心にぴったりとあてはまる言葉でした。順風満帆な人生などない。心傷つき、耐えがたい苦しみや悲しみ、光が見えない日を送ることも人生にはある。それが人間を成長させてくれるのだと。…頷けるけど、端的なこの言葉の方がすんなり当時の私の心に入ってきました。

人生を明るく照らす無上の喜び、達成感、成功体験…足し算を重ねて彩り豊かになることも、絶望する出来事や怒り、悲しみ…引き算して残る虚しさも心をもった人間にしか味わうことができないものです。誰の人生にも足し算も引き算もあるということ。そして、もし、引き算が続いたとしても、その先に必ず足し算があることを覚えていてください。

皆さんはこの1年、コロナ禍で「いつも通り」の生活を制限される中、受験を経験しました。進路を考えて初めて自分の「人生」についても考えたことでしょうか。卒業を前に皆さんの思いはどんなでしょうか。

「人生は足し算、引き算」これから長い人生を歩んでいく皆さんに最後に伝えたい言葉です。

3月1日の卒業式。学年全員が集う最後の日です。

卒業おめでとう。笑顔で巣立ってください。

いつまでも、あなたたちを見守っています。3年間ありがとうございました。



母校東高校に勤務することになって5年になります。最初の頃は、校内のあちこちで高校時代の記憶が突然甦るという経験をしました。花壇で友人と野菜を育てたこと、水深1.5mのプールでは溺れそうになりながら必死に泳いだこと、グラウンドに出ると学園祭のフォークダンス、赤の広場はテニスコートだったので、ボールを打つ音とカッコいいクラスメートの姿。などなど。それまで何十年も思い出すことさえなかった記憶が、場所に立つと急に浮かんでくるのです。

同窓会のお手伝いもしているので、懐かしい友人や先輩に会う機会も増えました。高校生という多感な時期を過ごした母校という場所は、やはり特別なものなのだと改めて気づきました。

「18歳の私」は「今の私」の姿を想像することすらありませんでした。毎日毎日、目の前にあることに取り組むだけで精一杯でした。失敗してやり直し、思い通りにならず悩む、それでも少しずつ前進する。その日々の積み重ねがずっと続いて「今の私」があるのだと思います。

高校を卒業すると、新しい世界が待っています。目標に向かってどんどん進んでください。周囲の人への優しさや謙虚な態度もお忘れなく。どんな未来になるのかは自分次第です。素敵な未来を切り開いてください。この酒折の地より、皆さんの活躍を応援しています。

「大河の一滴」

学年所属 寺本百合香

——人は泣きながら生まれてくる

シェークスピア『リア王』の登場人物はそうつぶやく。自らの意志ではなく、この世界に生まれてくること。赤ん坊の産声は、そのことが恐ろしく不安でならない孤独な人間の叫び声なのだと。

もちろん、高校生の皆さんにはこれから先に光りかがやく未来が待っていることだろう。しかし、一人一人がきっと様々な苦悩や葛藤を抱えていることと思う。そんな皆さんに贈りたい言葉、それは「人は皆大河の一滴である」という五木寛之の言葉である。空から降った雨は一滴の露となり、森の地面に吸い込まれる。そして小さな流れとなり、平野を抜けて大河に合流する。その流れに身を預けて海へと注ぐ大河の水の一滴が、私たちの命だという。やがて太陽の光に熱せられた海水は蒸発して空の雲となり、ふたたび雨水となって地上に注ぐ。

生物はみな、この循環の中で生きている。そんな壮大な流れの中の人間を考えると、ちっぽけで、それでも一人一人がより善く生きようとしている、愛おしい存在に思えてくる。私たちは生きているということで、すでに循環の中の一員として役目を果たしている。人生のどんな瞬間にも、その尊さを忘れずにいてほしい。



ありがとう

